『グローバル教育コンクール 2009』活動報告部門出展作品

世界の子どもの状況を知り
国際協力活動の一歩を踏み出そう

「Hi5!」ポスター式教材を活用した協働実践

「Hi5!」を活用した学童での取り組みの様子

2009 年 10 月 31 日

社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン

【目次】

第１章　活動の背景　2
１－１．セーブ・ザ・チルドレンとは　2
１－２．日本の子どもたちのための教育事業 Speaking Out　2
１－３．「Hi5!」ポスター式教材の開発—Speaking Out の集大成として　3
第２章　「Hi5!」の概要　4
２－１．「Hi5!」の目的　4
２－２．「Hi5!」の内容　4
第３章　「Hi5!」のユニークな協働実践／実践例紹介　7
３－１．「Hi5!」を活用した協働実践　7
３－２．実践例その①—健康の意義と子どもたちが健康であるための活動　9
３－３．実践例その②—貧困が子どもに与える影響とマイクロファイナンス　12
３－４．実践例その③—家の機能・役割と子どもの保護に関する活動　14
第４章　「Hi5!」協働実践によりもたらされた効果　16
４－１．子ども（参加者）の反応にみる「Hi5!」の効果　16
４－２．大人（使用者）の反応にみる「Hi5!」の効果　17
４－３．協働実施という形態にみる「Hi5!」の効果　18
結論　まとめと今後の展開　19

≪添付資料≫

◆「Hi5!」ポスター式教材 10 枚

◆「手引き」

第1章　活動の背景

1－1. セーブ・ザ・チルドレンとは

セーブ・ザ・チルドレン（以下 SC）は、国連経済社会理事会の NGO 最高資格である総合諮問資格を取得している、子ども支援のための国際 NGO です。活動の起源は 1919 年のイギリスまで遡ります。創設者であるエグランタイン・ジェブは、第一次世界大戦後の飢えに苦しむ子どもたちの惨状を何とかしようと活動を開始し、戦争で荒廃しきったヨーロッパの子どもたちを救うため、食糧や薬などの提供を行いました。SC の哲学はまたたく間に世界中に広がり、同じ志を持つ人々によって、同じ名前を冠した団体が世界各国で作られることとなりました。1924 年には国際連盟によって、ジェブが草稿した子どもの権利宣言が採択され、今日 193 の国々が締約する国連子どもの権利条約のルーツとなりました。

現在、世界で 29 カ国のそれぞれ独立した組織がパートナーを組み、国連子どもの権利条約を理念に、教育、食糧支援・保健栄養、子どもの搾取と虐待防止、紛争と災害への緊急援助などの多様な分野において、120 カ国以上で活動を展開しています。セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン（以下 SCJ）は、1986 年に設立され、ネパールやベトナム、ミャンマーやモンゴル、日本などの国々で、教育や保健栄養などの活動を行っています。

1－2. 日本の子どもたちのための教育事業 Speaking Out

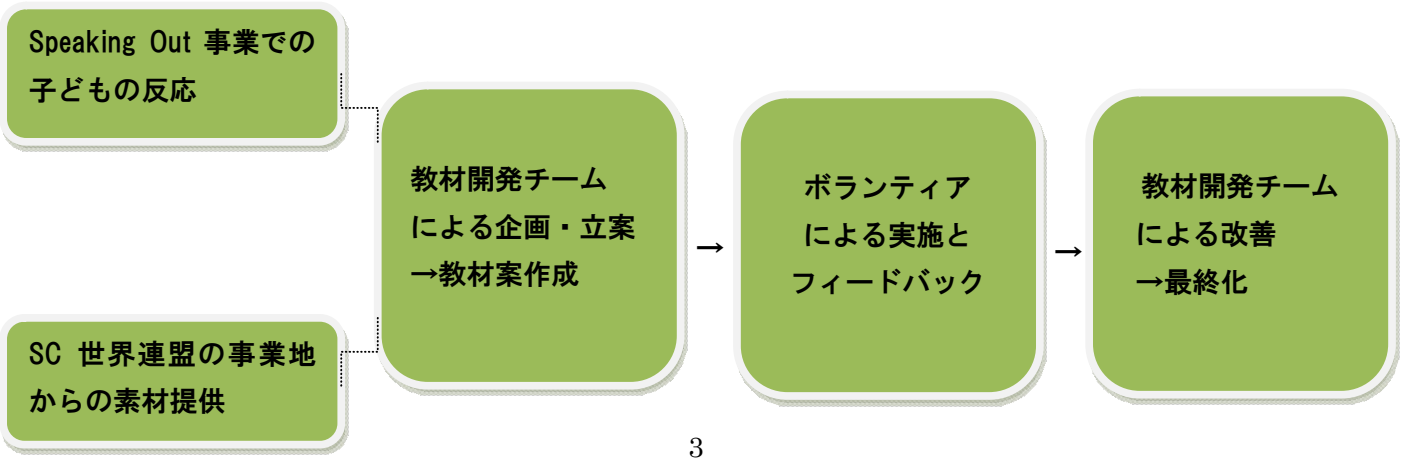
SCJ は、2003 年から、日本の子どもたちのための教育事業である Speaking Out を、SC UK の同事業を参考に開始しました。子どもたちが子どもの権利の視点をもち、意見を表明することを目的に、国際協力や子どもの権利についての参加型学習プログラムの実施や教材の開発などを行ってきました。2008 年 12 月末までに東京・大阪近郊の小中学校を中心とした約 300 ヶ所で、のべ約 17,000 人の子どもや大人、のべ約 1200 人のボランティアが参加しています。Speaking Out では、学校関係者などからの依頼内容や子どもたちの学習ニーズに応じて、子どもたちが世界の現状や子どもの権利を自分のものとして捉え、行動を起こせるよう支援するプログラムを、ボランティアとの協働により実施してきました。その過程で、子どもたちが興味を示しやすいアクティビティや、国際協力活動について知るための素材を多く蓄積してきています。

≪Speaking Out のこれまでの活動実績≫

	参加者数	ボランティア数	実施件数
2003 年度（2003.9～2004.3）	1423	74	16
2004 年度（2004.3～2004.12）	2442	145	32
2005 年度（2005.1～2005.12）	1925	157	41
2006 年度（2006.1～2006.12）	5434	258	72
2007 年度（2007.1～2007.12）	2978	238	59
2008 年度（2008.1～2008.12）	2250	321	84
合計	16452	1193	304

１－３.「Hi5!」ポスター式教材の開発―Speaking Out の集大成として

Speaking Out の集大成の一つとして開発されたのが、世界の子どもの状況や国際協力活動について、身近に捉えるためのポスター式教材「Hi5!」です。「Hi5!」の開発は、専門のコンサルタントとボランティアから成る教材開発チームにより、2007 年 3 月より開始されました。まず、Speaking Out の 5 年間の蓄積から、世界の子どもの状況と国際協力活動を網羅するテーマ構成と活動に根差した重要な情報、および、子どもたちが興味・関心を持って取り組みそうなアクティビティを選択しました。さらに、SCJ を含む、SC 世界連盟の 120 の事業地から、写真や子どもたちのケース・スタディなどの情報収集を行いました。これをもとに、「Hi5!」の企画・立案および、教材案の作成を行いました。それを、SCJ 職員のコーディネートのもと、ボランティアが、小中学校の国際理解学習の場や、児童館などの場で実践しを積み重ね、その結果を、教材開発チームにフィードバックしました。それらの声を反映し最終化したものが、この「Hi5!」です。



第2章 「Hi5!」の概要

2－1.「Hi5!」の目的

「Hi5!」の目的は、子どもたちが SC を通して、国際協力活動を身近に捉えること、世界中の子どもたちが直面する状況や思いを共感的に理解することです。

貧困が子どもたちの教育へのアクセスを妨げる。気候変動により自然災害が発生し避難を余儀なくされる子どもたちが増える。このような地球規模の課題が引き起こす子どもたちへの人権侵害を解決すべく、SC は世界中で活動を行っています。5 年間の Speaking Out 事業は、日本の子どもたちが、世界の現状や国際協力活動を自分のこととして主体的に捉え、行動に移すことが重要であるとの認識のもと実施を行ってきました。

一方で、たった一時間、一日の授業やプログラムでこの目的を達成することは容易ではありません。国際理解と題された授業に参加するだけで、自分とは無関係であると考えてしまう子どももまだ多いのが現状です。そこで、SCJ では、まず、子どもたち自身が、自分たちと同じ年代の世界の子どもの状況や国際協力活動について関心を高められるようにすること、また、より多くの子どもと大人がこれらのことについて興味を示し議論を行えるような環境を作っていくことが、まず重要であると考え、「Hi5!」の開発に至りました。

世界の子どもの状況や国際協力活動を知るという「Hi5!」のねらいは、「世界のさまざまな人々が共生できる公正な社会をつくる」というグローバル教育の理念の実現の第一歩にも資するものであると考えています。

2－2.「Hi5!」の内容

２－１. の目的を達成するために、「Hi5!」の形態や対象は、以下のとおりとなっています。
■形態：A2 サイズポスター・カラー両面／全 10 テーマ／「手引き」付属
■対象：主に小学校高学年
■ポスター1 枚に対する対象人数：4～5 人を想定

ポスターは、両面とも、フォトランゲージやすごろく、迷路など、ねらいにそった複数のアクティビティから構成されています。各アクティビティは、5－30 分で実施できます。また 120 の事業地から収集した写真やケース・スタディなど、各アクティビティの素材も充実しています。このため、教員や国際協力の関係者など、使用者が対象者数・年齢・時間などに応じて柔軟に選択し、自由に組み立てて実施することが可能です。たとえば、難民に関するポスターについては、以下のようなアクティビティで構成されています。

表面【左】: イラストランゲージの手法で、「学校」や「病院」など、難民キャンプでの支援活動の内容を学びます。
裏面【右】: 難民となった子どもたちのケース・スタディや、難民となる状況について考えるゲームなどがあります。

テーマについては、貧困や紛争など地球規模の課題と関連するもの、学校や健康、子どもの保護など、身近な課題から結びつけて考えやすいものなど、10 から構成されています。なお、①は世界の現状を知る導入に、⑩は①～⑨を踏まえ、足元から自分にできることを考える際に、最適なものとなっています。

	タイトル	テーマ
①	世界のいま!! ～知ろう！はじめよう！～	世界の現状やその解決にむけた国際協力の取り組み
②	すてきな笑顔に出会いたい ～セーブ・ザ・チルドレンの活動～	子どもの権利にもとづくセーブ･ザ･チルドレンの活動
③	学校ってなんだろう?	学校の意義と地域に根差した学校建設
④	Rewrite the Future ～いっしょに描こう!!子どもの未来～	紛争下の子どもたちの状況と教育の重要性
⑤	家にかえりたい!! ～難民になるってどういうこと？～	難民の状況と難民キャンプでの活動

⑥	健康であるために	健康の意義と子どもたちが健康であるための活動
⑦	家ってなんだろう?	家の機能・役割と子どもの保護に関する活動
⑧	生活をとりもどそう!!	自然災害発生時の緊急活動
⑨	貧しさからぬけだそう!!	貧困が子どもに与える影響とマイクロファイナンス
⑩	近くにもあるよね! ～わたしやわたしのまわりにも～	先進国の子どもたちの状況と国内活動

各「Hi5!」には「手引き」が付属します。「手引き」には、各ポスターのねらいと内容、ポスターにおける各アクティビティのねらいやすすめ方、写真・イラストの説明などを記載しています。使用者は、「手引き」を参考にすることで、「Hi5!」を活用できます。対象は主に小学校高学年を想定していますが、時間や人数などを考慮することで小学校低・中学年に、さらに、「手引き」のアレンジ等を参照していただき深めることで中学生以上にも対応可能です。

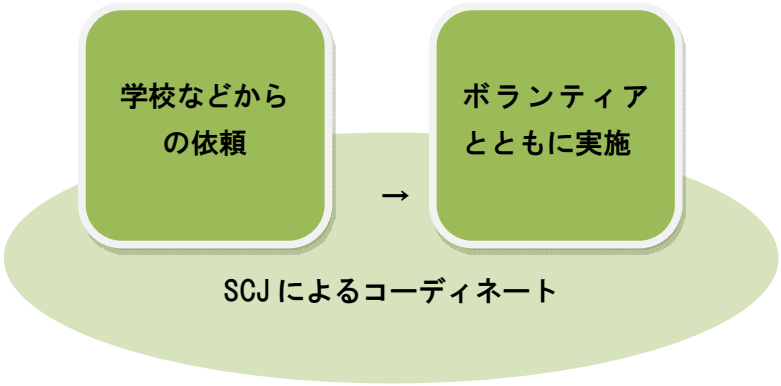
第３章 「Hi5!」のユニークな協働実践／実践例紹介

３－１.「Hi5!」を活用した協働実践

第２章において、「Hi5!」が世界の子どもの状況と国際協力活動について知ることをねらいとして開発されていることを確認しました。第３章では、「Hi5!」を活用した協働の方法と、実際に「Hi5!」を活用した事例を紹介しながら、より具体的に「Hi5!」の実践のあり方を検討していきます。

２－２．でみたように、「Hi5!」はポスター式教材という形態を取っており、アクティビティの実施や豊富な写真、ケース・スタディなどにより、子どもたちが興味関心を高めやすい工夫がなされています。もう一つ、「Hi5!」においてユニークな部分は、協働実践という普及のあり方にあります。Speaking Out を通じて、多くの国際理解などの活動がその良さを認められつつも、一つの授業で完結してしまうなど、なかなか、点が線や面になりにくい現状を痛感しました。「Hi5!」では、その課題を克服するために、ボランティアによる自主グループや国際協力や国際理解教育に関するサークルなどの団体との協働に基づく継続的な実施により、点を線に変えていくことを目指しました。また、Speaking Out 事業では、主に東京と大阪での実施に限定されていましたが、仙台・名古屋など首都圏以外の地域での協働というスタイルをとることにより、地域的な拡がりを創りだすことを目指しました。

【Speaking Out 事業における実施のあり方】



※これまでの実施のあり方では、学校などからの依頼に応じて、個別のプログラムを作り、その都度、ボランティアをコーディネートして、その授業が終われば完結するという形式を取っていました。

【地域での協働を通じた実施のあり方】

※ボランティアは自主グループとして機能し、自ら児童館や学童などからの依頼に応じるようになりました。また、首都圏のみならず、名古屋や仙台の国際協力や国際理解教育に関する団体とパートナーシップを結び、実施を行うようにしました。首都圏以外の地域で協働実践を行った団体は、以下のとおりです。

〇宮城県仙台市：ハビタットフレンズ仙台
〇愛知県名古屋市：国際理解教育プログラム（EIUP）
〇兵庫県三田市：CLUB GEORDIE

さらに、実施場所もこれまでの学校の現場から、より、広く多くの子どもたちに状況を知ってもらえるように、児童館など、公教育以外の場も視野に入れ、実践してきました。特に、児童館では、指定管理する NPO とボランティアによる自主グループが協力関係を結ぶ形で、活動を実施したり、夏休みのイベントに「Hi5!」を取り入れたりしました。

次節以降、３－２．から３－４．では、実際に、「Hi5!」を活用して実践された活動の事例を紹介させていただきます。実施場所、位置づけ、形態ともに多様なものを扱うことで、実践される方の参考になるようにしています。

節	実施場所	実施の位置づけ	実施形態
３－２．	神奈川県横浜市	学校での国際理解学習	ボランティア グループ実施
３－３．	千葉県白井市	公的機関での夏のイベント	
３－４．	宮城県仙台市	「地球フェスタ」のワークショップ	協働団体による実施

また、グローバル教育では、自分の身近な課題と、世界の課題を関連づけて考えていくことが非常に重要であると考えられます。そこで、まず、３－２．において、まさに身近な課題である「健康」を扱った活動を取り上げます。そして、３－３．において、格差が叫ばれる昨今、日本の子どもたちにも現実のものとなりつつある「貧困」をテーマとした実践例を紹介させていただきます。最後に、３－４．では、「家」という、もっとも子どもたちが安全・安心を感じられる場について取り上げます。それぞれのプログラムの流れには、添付資料の「手引き」で対応するページを記載しますので、あわせてご覧いただければ、よりイメージしていただきやすくなります。

3－2. 実践例その①―健康の意義と子どもたちが健康であるための活動

本活動は、子どもたちが、健康について再認識すること、SC の活動を通じて、世界の医療保健問題について知ることを企図しています。簡単なアイスブレイクを実施し、環境作りを行った後、シエラレオネのケース・スタディから、世界の子どもの健康状況についても学び、その上で、自分自身の健康についても考えていくことで、健康を再認識する、ということを行いました。

日時：2009 年 5 月 9 日【土】10：20～11：10（10 分休憩）11：20～12：10
実施場所：神奈川県横浜市立平楽中学校
実施の位置づけ：国際理解学習
参加者人数（学年）：73 名（中学 1 年生 2 クラス／5 人ずつグループ分けして実施）
実施体制：ボランティア・グループ 6 名（関東のボランティア・グループ）
当日活用した「Hi5!」：⑥『健康であるために』

プログラムの流れ：

時間	活動	ねらい	対応する手引きページ
10 分	（1）ボランティア自己紹介 ボランティアの紹介 SC の紹介	当日のボランティアと SC の活動を知る。	―
5 分	（2）アイスブレイク：立って座って ＊進行者が英語で“stand up”と言ったら立つ。”sit down”と言ったら座る。進行者の指示に従って、立ったり座ったりを繰り返す。	体をあたため、緊張をほぐす。	―

10 分	（3）世界の食べ物 ＊国名と食べ物の絵を線で結ぶ。 ＊世界でどんな食べ物が食べられているかをみんなで確認する。	食を入口として、健康のテーマで、参加しやすい環境を整える。	20
25 分	（4）飢餓マップ ＊ルールの説明に沿って世界地図の色塗りをする。 ＊色を確認しながら世界地図から読み取れることを考える。 －どの地域に偏りがあるか？ －それはなぜか？ ⇒世界地図の意味を全体で共有する。 ＊周囲の写真を見ながら、世界の子どもたちの健康状態とそれに対する支援活動を確認する。	世界の飢餓の状況から、「健康」について再認識する。また、SC の活動を通して、世界の医療保健問題について知る。	19
10 分	（5）子どもたちの声 ＊シエラレオネの安全な水のアクセス、栄養失調、5 歳までの生存率に関するデータをクイズ形式で当てる。 ＊ビラルくんのケース・スタディを読む。	シエラレオネの子どもの健康状況を数字によるデータとケース・スタディから知る。	19
10 分	休憩		
10 分	（6）アイスブレイク：人間知恵の輪 ＊グループで輪を作る。両手を別々の、隣以外の人とつなぐ。つないだ手は離さないで、１つの輪にほどく。	グループの輪（和）を強化する。	―
20 分	（7）健康について ＊グループで健康によいこと・よくないこと、健康ならできることの 3 点について、自分の考えを付箋に記入する。 ＊付箋を模造紙に貼りつけ整理する（グループ内で考えを共有）。 ＊他のグループの模造紙と交換し、アイディアを共有する。	自分自身の日常生活を振り返り健康について再認識する。その際、以下の点にも留意する。 ―シエラレオネのケースを参考に、国外の子どもの健康についても視野を広げる。 ―健康について、精神面、社会面にも視野を広げる。	19
10 分	（8）まとめ・振り返り ＊参加者の感想を聞く。	健康の重要性を再確認する。	―

子どもたちは、自分にとって身近な課題である健康と世界の子どもたちの健康の状況を検討しながら、考えを深めていきました。まず、「（３）世界の食べ物」のように楽しみながら、参加できるアクティビティを取り入れることで、緊張をほどくことができ、遊びを楽しみながらも、グループの落ち着きが生まれました。「（７）グループワーク：健康について」では、各々が、食事や衛生環境、睡眠など物理・身体面でのことや、学校や遊びなど社会面でのことについて、アイディアを積極的に出し、グループ内の意見共有ができていました。気持ちが安定すること（健康にいいこと）、汚染された水をのむこと（健康によくないこと）など、他のグループとの意見の共有も試みることができました。最後に、「（８）まとめ」では、健康であるための活動に重点を置き話しましたが、それがよく理解されていました。参加した子どもたちの声からも、健康に関する世界の現状を知り、次の行動へ起こそうとしていることを読み取ることができます。

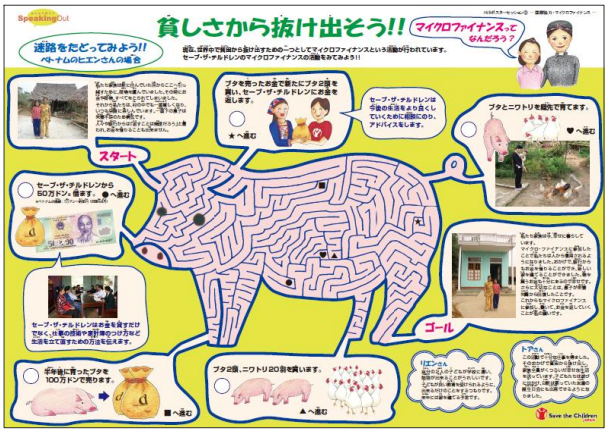
参加した子どもたちの声（授業後のコメントより引用）：
●生まれた場所のちがいでこんなにも、大きなちがいがあったり、3 秒に 1 人が死んでいるのに、僕たちは何も知らずに生きていたり…。だから、僕に出来ることをしようと思いました。募金も 1 つのしゅだんだけど、その国や人々について考える事も大切なんじゃないかと思いました。
●世界には、栄養ぶそくで 1 日に 3 人しんでいるということがわかりました。あたりまえのようにごはんを食べている私たちとはちがうし、水もきれいでぜいたくをしているなとおもいました。そしてごはんを食べられない人がいるのにもかかわらずみんな平気でたべものをのこしています。わたしもその 1 人です。なのでこれからはごはんをあまりのこさないように改めます。
●自分たちだけが良ければいいんじゃなくて、周りの人達も幸せになれるのがみんなの「良い」だと思います。又、「助けよう！」ではなく「平等」という気持ちで募金などをしようと思いました。

ボランティア・グループによる実施の様子

3－3. 実践例その②一貧困が子どもに与える影響とマイクロファイナンス

本活動は、子どもたちが、貧困が子どもに与える影響について認識すること、SC の活動を通じて、貧困から抜け出すための手段の一つとしてマイクロファイナンスについて知ることを企図しています。簡単なアイスブレイクを実施し、環境作りを行った後、迷路をたどりながら、ベトナムでのマイクロファインスの仕組み知り、イギリスの貧困のケース・スタディを学ぶことで、貧困について考えました。

日時：2009 年 8 月 4 日【火】13：00～14：20（10 分休憩）
実施場所：千葉県白井市青少年女性センター
実施の位置づけ：夏休みのイベントの一部
参加者人数（学年）：30 名（小学校 2 年～6 年）
実施体制：4 名（関東のボランティア・グループ）
当日活用した「Hi5!」：⑨『貧しさから抜け出そう!!』



時間	活動	ねらい	対応する手引きページ
10 分	（1）ボランティア自己紹介 ボランティアの紹介 SC の紹介	当日のボランティアと SC の活動を知る。	―
15 分	（2）アイスブレイク：お店屋さん 進行者が、「くつ屋さん」「ケーキ屋さん」などのお題を各グループに声を出さずに伝え、参加者はジェスチャーのみでお店を表現。他のグループの前で順に披露し、当てっこをする。	声を出し合いながら、緊張をほぐすことによって、できたばかりのグループのつながりを強化する。	―
25 分	（3）マイクロファイナンスって？	貧困から抜け出すための自立の支	27

	＊豚の迷路を進み、たどり着いた箇所をグループの代表が読む。 ＊迷路をたどった順番を進行者と見直し、マイクロファイナンスの仕組みを確認する。	援としての、マイクロファイナンスの仕組みを知る。	
10 分	休憩		
10 分	（4）ベリンダさんのお話 貧困にまつわるケース・スタディを読む。場所と背景は付箋で隠しておき、フォトランゲージについて考える。	先進国での貧困問題と、子どもによる貧困撲滅キャンペーンを通して、貧困とそれに対する取り組みを知る。	27
10 分	（5）まとめ・振り返り ＊進行者の話を聞く。	貧困から自立へ向けた活動を再確認する。	―

子どもたちの反応としては、迷路を使うという手法が面白く、全体的にとても興味を持って取り組んでいました。特に「（3）マイクロファイナンスって？」では、書く作業を楽しみながら、マイクロファイナンスの仕組みを順序立てて知ることができていました。こうすることで、貧困という少し距離のあるテーマにも、積極的に取り組む導入となったようです。「（5）まとめ・振り返り」では、子どもによる貧困をなくすキャンペーン（フォトランゲージ）で、子どもたちが主体的に参加していることに驚いていました。このような新鮮な驚きは、子どもたちが貧困に対する行動へ移すことへの第一歩につながると考えられます。実施場所となった、千葉県白井市青少年女性センターの担当職員からも、楽しみながらしっかり知ることができたというコメントがありました。身近な公的機関の夏休みイベントで実践したことにより、子どもたちがオープンな環境で楽しみながら、貧困から自立へ向けての多様な取り組みについて、理解を深められたことが分かります。

イベント担当職員の声（実施後のインタビューより）：
学校では、国際理解や人権の授業を実施する時間が十分に取れない現状もあるかと思います。そこで、参加した子どもたちは、貧困や、世界の子どもたちにも自分たち自身にも、人権があるということを知る、いい機会となりました。
迷路を辿って楽しみながら進めていきましたが、知るべきことを織り込んだしっかりとした内容です。楽しみながら学んだ時間を、記憶の中にとどめておいて、将来、何かをはじめるきっかけや、手助けになればと思います。

ポスターの内容に興味を示す子どもたち

3－4. 実践例その③―家の機能・役割と子どもの保護に関する活動

本活動は、子どもたちが、家が果たす役割について再認識すること、SC の活動を通じて、子どもの成長・発達に安心・安全な環境が不可欠であることを知ることを企図しています。簡単なアイスブレイクを実施し、環境作りを行った後、世界の家の様子から家の役割を考えるグループワークや、もしも家がなくなったらどうするかについて意見交換することで、家が私たちの生活に果たす重要な役割について考えました。

日時：2009 年 9 月 19 日【土】10：00～11：00
実施場所：仙台国際交流センター
実施の位置づけ：「地球フェスタ」のワークショップ
参加者人数（学年）：16 名（小学生 8 名／大人 8 名）
実施体制：4 名（ハビタットフレンズ仙台）
当日活用した「Hi5!」⑦：『家ってなんだろう？』

時間	活動	ねらい	対応する手引きページ
10 分	（1）ボランティア自己紹介 ボランティアの紹介 SC の紹介	協働団体と SC の活動を知る。	―
10 分	（2）アイスブレイク：人間彫刻 参加者は、「家で一番楽しい時間」をグループで音を出さずに表現する。ほかの参加者が何をしている時かを当てる。	緊張をほぐすことによって、出会ったばかりのグループのつながりを強化する。また、今回のテーマが家であることを意識付ける。	―
25 分	（3）家ってなんだろう？ ＊グループで話し合いながら、好きな家の写真を選ぶ。	参加者は、さまざまな家の様子や役割を考えることによって、家が安心・安全な環境に不可欠である	22

	＊どうしてその家が良いと思ったのかを話合い、家が住む人たちに果たす役割を考える。 ＊グループごとに全体で意見を共有し、家の果たす役割について合意する。	ということを認識する。	
10 分	（4）もしも家がなかったら？ ＊ポスターを見ながら、もしも家がなかったら、どこで寝るか、何をするかをグループで話し合い、共有する。 ＊SC が、モンゴルでストリートチルドレンに支援している内容を話す。	参加者は、SC のモンゴルの事例を通して、ストリートチルドレンの状況を理解し子どもの保護の重要性を知る。	22
5 分	（5）まとめ・振り返り ＊参加者が感想を聞き、進行者の話を聞く。	参加者は、家の果たす役割を再確認する。	―

子どもたちの反応としては、イベントという環境の中で、はじめて出会う人たちと話し合いをしながら、家の役割について考えることがおもしろかった、家とはなにか感じることができた、などという声が聞かれました。また、それぞれの家で生活している人たちの気持ちや暮らしの詳細がもっと知りたいという意見もありました。特に「（3）家ってなんだろう？」では、11 枚もの、様相も、国や地域も全く違う家の写真を見比べながら、また、自分の家のことも重ね合わせながら、それぞれの家のよさや役割について大人と子どもが一緒に多様な意見を出し合っていました。こうすることで、家とはなにかを実感することができたようです。「（4）もしも家がなかったら？」では、はじめはそのようなことは考えたこともない、という戸惑いの様子も見受けられました。しかし、公園で寝るのだろうか、親戚や友達を頼りにするのだろうか、でも、親戚も友達もいない子どもはどうするんだろうか、と話合いを進めていく中で、ストリートチルドレンの状況について考えを巡らすことができたようです。イベントのように誰もが参加できる場で、子どもと大人がいっしょになって率直に考えを出し合うことで、安心・安全な環境の重要性について認識することができました。協働団体であるハビタットフレンズ仙台からも、子どもたちの反応もよく、自身の子どもが通う施設でも実践してみたいという意見が聞かれ、現在、12 月の実施に向けて準備中です。

第４章 「Hi5!」協働実践によりもたらされた効果

４－１．子ども（参加者）の反応にみる「Hi5!」の効果

本章では、「Hi5!」がグローバル教育に貢献する可能性を検討すべく、子ども、大人、双方の反応と、協働という実施形態からみる「Hi5!」の効果を検証していきます。本節では、

●３－２．から３－４．でみた「Hi5!」に参加した子どもたちの声

●2009 年 8－9 月に実施したアンケー調査

をもとに、子どもにもたらした効果を論じます。まず、アンケートでは、2008 年 8－9 月に実施した 6 回の「Hi5!」を活用した活動終了後のアンケートから、子どもたちの反応を分析しました。「Hi5!」に参加してどうだったか、という問いに対して、約 77%の子どもたちがとても楽しかった、もしくは、楽しかったと回答しました。分かりやすかったか、という問いに対しては、実にほぼ 100%の子どもたちが、「とてもわかりやすかった」、あるいは、「わかりやすかった」と答えました。

≪アンケートの結果≫

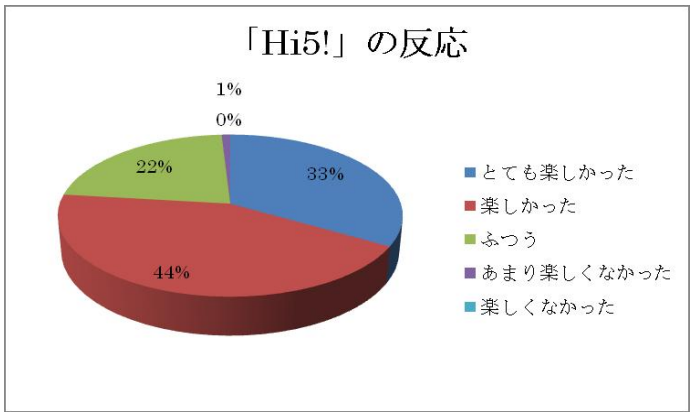
★「Hi5!」をやってみて、どうでしたか？

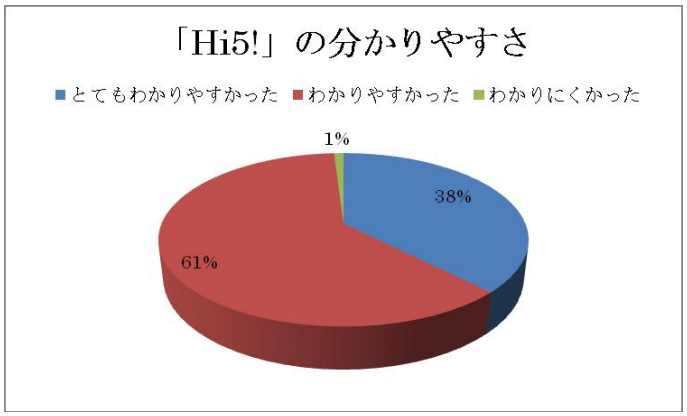
とても楽しかった	楽しかった	ふつう	あまり楽しくない	楽しくなかった
36	47	24	1	0

★わかりやすかったですか？

とてもわかりやすかった	わかりやすかった	わかりにくかった
38	62	1

※有効回答数は、質問①が 108 名、質問②が 101 名でした。





よって、参加した子どもたちのうちの 7 割以上が、「Hi5!」をやってみて「楽しかった」と、また、ほぼ全員が「Hi5!」が、「分かりやすい」と感じていることがわかります。これらの子どもたちは、「もっと子どもたちがどのようにすごしているのか知りたい」、「(ケース・スタディの登場人物の子どもが) 今、どうなっているのか知りたい」、「ひんこんの子がどれだけいるのか」など、テーマに応じ、さらにもっと知りたい、という興味・関心を高めています。また、「私も、当たり前のように出てくる水、食べ物を大切にしたい」など、自分自身の行動の変化に言及している子どもも多くいます。これは、「Hi5!」を製作する際に意図していた、世界の状況や国際協力活動を知るきっかけを作り、次の行動へつなげていくというねらいを達成しているとみることができます。以下、「Hi5!」の特徴が、どのように子どもたちの反応に影響を及ぼしたか、整理しておきます。

「Hi5!」の特徴	子どもの反応にみる「Hi5!」の効果
●すごろくや迷路など、アクティビティが充実している。 ●写真やケース・スタディなど、各アクティビティの素材も豊富である。	●7 割以上の子どもたちが、楽しかったと答えている。 ●ほぼ全員の子どもたちが、分かりやすかったと答えている。 ●より詳しく知りたい、調べてみたいなど、興味関心を高めている。 ●自身の行動変容につながっている。

4－2. 大人(使用者)の反応にみる「Hi5!」の効果

「Hi5!」を使用した大人からも、ゲームなどのアクティビティに、子どもが元気に反応しており、子どもの集中力と感性に驚いたという意見が多数あります。イラストや写真などが分かりやすく、子どもといっしょに考えながら学ぶことができるという定評も得られています。また、まず自分の学びにもなった、伝えることで自分の理解にもつながったなど、大人自身の学びにもつながっているという点を評価する意見も多く聞かれています。これは、「Hi5!」の一つの大きなインパクトであるといえます。

「Hi5!」の特徴	大人の反応にみる「Hi5!」の効果
●ポスター形式できている。 ●写真やイラスト、ケース・スタディが分かりやすい。	●ポスターを囲みながら会話をし、子どもと子ども、子どもと大人どうしが楽しみながら学び合える。 ●おとな自身の学びにもつながる。

４－３. 協働実施という形態にみる「Hi5!」の効果

「Hi5!」の普及にあたっては、協働というユニークな形態をとり、団体やボランティア・グループなど、自主的な組織による実施を強化しています。また、より多くの子どもたちのアクセスを確保できるよう名古屋、仙台など、首都圏以外の地域での実施をできるようにし、学童や児童館、子ども向けのイベントなど、公教育以外の場での実施も重視しています。

その結果、2009 年以降、徐々に首都圏以外での実施や、公教育の場以外での実施の形態が見られるようになりました。2009 年 1 月から 9 月 30 日までの間で実施した 44 件のうち、仙台、名古屋、奈良、大阪など首都圏以外での実施が 7 件あり、これらはすべて協働団体によるものです。また、20 件は子どもが集まるイベントや児童館・学童など、公教育の場以外での実践となりました。このような実施状況から、「Hi5!」の協働実践が、子どもたちが世界の現状や国際協力活動について知るための機会拡大に貢献していると考えられます。

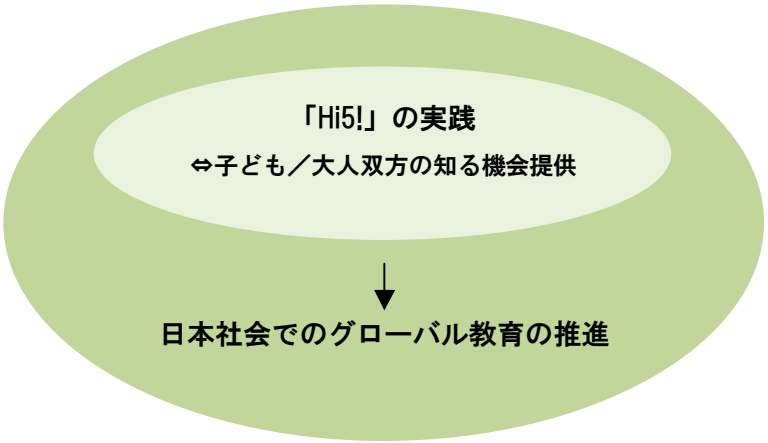
「Hi5!」協働実践の特徴	協働がもたらした成果
●協働団体、ボランティア・グループなど、自主的な組織による実施を強化した。 ●首都圏だけでなく、首都圏以外の実施もできるようにした。 ●児童館や学童など、公教育以外の場での実施も重視した。	●首都圏以外での実施を 7 件実施することができた。それらはすべて、地域の団体によるものであった。 ●実施の半数近くがオープンな環境で実施され、より多くの子どもたちが参加できる可能性を切り拓いた。

結論　まとめと今後の展開

第 1 章では「Hi5!」を開発した背景について、2 章ではその概要について説明し、3 章で、具体的に、「Hi5!」をどのように実践しているかについて、協働実践体制とプログラム内容に焦点を当て、述べてきました。第 4 章では、実際に参加した子どもと大人の声から、「Hi5!」の効果について検証し、子どもたちが、「Hi5!」に触れることを通して、国際協力活動をより身近に捉えられるようになってきていることを報告しました。

２－１.で述べたように、グローバル教育の大きなゴールを一日で達成することは難しい一方、まだまだ、関心を持つ子どもたちの数も少ないのが現状です。「Hi5!」は、ポスターという形式を導入すること、また、地域での協働という実践形態をとり、公教育以外にも実践の場を求めていくことで、より多くの子どもたちが世界の子どもの状況や国際協力活動についてのきっかけを掴むための門戸を開く可能性を持っていることを実証してきました。そして、このことは、グローバル教育がこの日本社会に根付くことにも貢献しうるものと考えられます。

これからも、より多くの子どもたちが、国際協力への第一歩を踏み出せるよう、「Hi5!」の普及を実施していきたいと考えています。そこで、2009 年 8 月からは、教員の方々や国際協力、子ども支援の関係者を対象とした販売も開始しました。今秋から冬にかけては、子どもたちが「Hi5!」を活用して地域の大人たちに、紛争下の子どもたちの状況を伝えるセッションの実施や、教員向けセミナーの開催などが予定されています。今後とも、「Hi5!」を通じて、子どもと大人がパートナーシップを結びながら、グローバル教育の輪を広げていけるような環境を、創り出していきます。



以　上